

## まちづくりのアンチテーゼ

都市環境科学研究所 代表取締役 沖 始

企画には3つの構成要素がある。創造性、計画性、現実性である。理想的には、この3つがひとつになることである。都市計画に対するこれまでの価値観は、豊かな街とは道路や上下水道が完備されていて緑が豊か、といったようにハードウェア（計画性）が目目されていた。もともと都市計画は、役所が主体であり自由度の少ないものである。ところが、最近ではイベントなどのソフトウェア（創造性）がこの分野で注目を浴びるようになった。

まず、集落（都市）の膨張があると秩序の必要性が生まれ、さまざまな社会要求が発生する（たとえば交通整備等）。行政や各種団体に経済力があれば社会要求に対応し、より魅力的な街を作り、成長を継続することができる。逆に対応を誤ったり力がないと、街は衰退に向かう。小さな町が名物作りのために、イベント開催等の積極的な活動を行なっている。その結果、自治省の街作り特別対策費を取得し、本来の力以上の成果を上げるケースが出てきた。人口8万人にしかすぎない出雲市が、2百万都市でさえ持てないようなドームを作ったのはそのいい例である。

イベントを開催するには場所が必要である。そのため土木へ働きかけることになる。これは、従来のハードウェアを整えるとソフトウェアがついてくるという考えとは反対であるが、結果的に活性化への近道となっている。地方都市が大都市に対抗していくにはイベントにおいて他にはないと言った人がいるが、それはまさに正解である。1985年を境とした「ものの時代」から「こころの時代」への変化が、都市計画の潮流を変えたといえる。

街が活性化するには前提として人が集まらなくてはならない。人に行きたいという刺激を与える街づくりが要求される。それは、居て気持ちのいいアメニティーの高い空間を作ることであり、過ごした時間がとても充実していたという価値を創造することである。文化的な膨らみの大きさがこれからの街の魅力を決める。そういった意味で、依然ハードウェア中心の大都市に対して地方都

市が特色作りのためにさまざまな活動をしているのは楽しみなことである。これらの活動が街作りにも影響を与え、地方の時代を迎える日がくることを期待している。

Q：東京に集中している機能を地方へ分散させるという話がよくあるが、今後の見通しはいかがか。

A：東京の住環境は大変悪いといえる。利便性は高いが人間疎外しかない。都市形成の自然体としてやがてそうならざるを得ない。行政やビジネスの利便性をいつまで保持できるかが問題だが、やがて東京の頑張りにも限界がきて意図しなくとも自然にそうなってゆく。

Q：いままで訪問された街で特に印象深い街があれば教えてください。

A：米国にサンアントニオという小さな街がある。これといった観光資源はないがコンベンションシティとして人に行きたいという気をおこさせる街である。それを支えているのは役所の事務局の人たちであり、住民の自発的な活動である。彼らのホスピタリティーが、訪れる人たちに感動を与え、街を一層魅力的にしている。

Q：都心において人口の減少が甚だしい。都心部の活性化にはどんな策があるのだろうか。

A：政策的には市営住宅を作る等の手段もあるが、これからは都市においても人とのつながりを求めるべきだ。そのためにもアメニティー、すなわち、住んでいる人の心の快適さを、大切に街作りを心がける。浅草など下町は、その際のモデルになるのではないか。

(東京大学 徐 敏堯 記)

[今後の予定]

7月14日 国際化時代の放送

NHK放送文化研究所長 山崎隆保

9月8日 バイオ技術と食糧

バイオシステムインターナショナル社長 松宮弘幸  
(ご入会ご希望の方は、OR学会事務局までご連絡ください。03-3815-3351)。申込書をお送りいたします)